

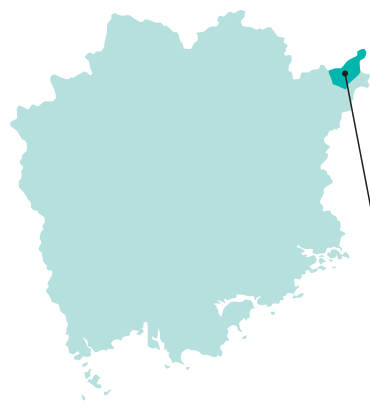


西栗倉村は森林に囲まれ、村域は智頭急行智頭線（JR上郡駅〈山陽本線〉～JR智頭駅〈JR因美線〉）と国道373号線（兵庫県赤穂市～岡山県経由～鳥取県鳥取市）沿いに細長く広がる（写真提供：西栗倉村）

地域を元気に!!
わがまちの
活力
アップ



村域の93%を占める森林を資源に！ 村ぐるみで挑戦する 百年の森林構想



岡山県

西栗倉村

多くの市町村が合併に向かい協議を重ねていた“平成の大合併”の時代、岡山県の北東端にある英田郡西栗倉村は、合併せず独立の道を歩むという決断をした。目指したのは村域の93%を占める森林を利用する〈百年の森林〉構想に村ぐるみで挑むこと。価値ある森林資源を子や孫に50年、100年単位で残してゆくというものだった。

構想は、立ち上げ時のバージョン1.0から一段ステップアップし、現在はバージョン2.0の段階に入っている。

いまや、全国の行政や民間企業が熱い視線を注ぐ〈百年の森林〉構想。その端緒から現状などについて、同村役場産業観光課にお話をうかがった。

合併の可否を問う住民投票の結果は村を二分した

2004～2005年ごろは“平成の大合併”の流れが加速していた。合併することによるスケールメリットなどに注目する多くの市町村が合併へと動いたことは記憶に新しい。

岡山県北東部に位置し山々に囲まれた山里、西栗倉村も例外ではなかった。周辺の「勝田町、大原町、東栗倉村、美作町、作東町、英田町」とともに7町村で設置した勝英地域合併協議会のメンバーとなった。しかし2004年、西栗倉村では合併の可否を問う住民投票を行った。住民のほぼ100%が投票に参加し、その結果は村を二分したが、僅差で「協議会から脱退する」というものだった。

西栗倉村は独立の道を歩むことになった——。

とはいうものの、村としてどのような道を進めばよいのかという難問に直面する。大きな工業団地があるわけでもなし、特徴ある農産物もない。周囲は山に囲まれており漁業もできない。

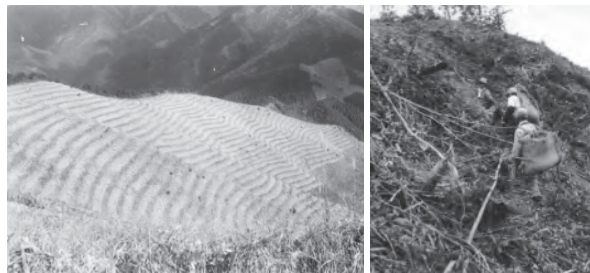
西栗倉村として独自にできるモノ・コトとは……。

独立の道を歩き始めて数年間、熟慮に熟慮を重ね、行き着いたところが村の93%を占める森林を利用した事業を興そうということだった。民間の関係する企業、役場、そして主役である住民の意見を集約し、2009年、「百年の森林構想」が着想されたのである。

西栗倉村はもともとは林業が盛んだったが……

太平洋戦争後約10年経った1950年代半ば、我が国の住宅は木造建築が主流であり、戦後復興のための建築用木材の需要が高まっていた。山林資源の豊富な西栗倉村も例外ではなく、拡大造林化に拍車がかかり、天然林からスギやヒノキの人工林に転換していった。先人たちは山へ入りスギやヒノキの苗木を植林していった。当時は木材の価格も高く、植林することは「子や孫への『投資』」でもあった。

近隣の鳥取県智頭町を含め、中国山地一帯が林業で生計を立てる地域だった。製材所もあり、村はそ



1950年代に西栗倉村で行われていた植林事業（写真提供：西栗倉村）

れなりに潤っていたという。

ところが、時代とともに林業は衰退してゆく。

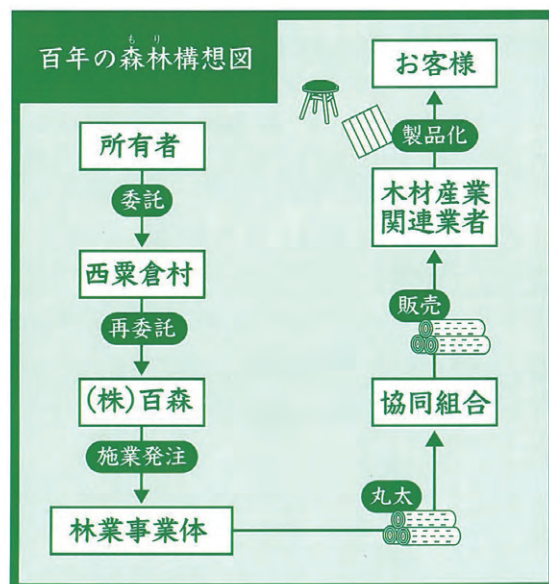
外国から安い木材が入ってくるようになったことや、木材価格そのものが下落するなどさまざまな要因があった。山林の所有者や林業に従事する住民の高齢化、また山林所有者が村外に移り住む不在村者の増加なども衰退を推し進めた。

山奥の森林は道が悪く、手入れが行き届いていない箇所も多く存在した。ひとたび管理がおろそかになると、災害時に土砂崩れが起こるなどして、森林の状況はさらに悪化していった。

百年の森林構想は、こうしたなかで策定された。

その仕組みは、次のようなものだ。

基本は、森林の管理を所有者に任せるのではなく、村が主体となって行うようにすること。村が森林の所有者と契約し、まとまりある形で管理・整備を行う。また、樹木の生長過程で行う間伐作業も村が中心となって進め、伐採した木材の搬出も村が行うという、一貫した仕組みが出来上がった（下図参照）。





樹木1本1本の生育状態を正確に把握する地道な作業（写真提供：株式会社百森）

図のなかに、株式会社百森という組織がある。

「株式会社百森は2017年に設立されました。それまでは、村が直接森林の所有者さんと森林整備での長期契約を結んでいました。しかし、担当者が異動したり、専門的な知識が不足していたりで、なかなか事業が定着しにくかった。

そうした課題を解決するため、地域おこし協力隊制度を活用して株式会社百森を立ち上げ、村の委託を受けて森林の所有者さんと契約を結び、整備を計画し、地域の林業事業体に発注するという仕組みをつくったのです」（産業観光課／井上さん）

具体的な仕組みは以下のようになっている。

村役場：国や県との交渉・許認可など公務的機能を担当

株式会社百森：森林所有者との契約締結、森林管理、調査・設計などを担当

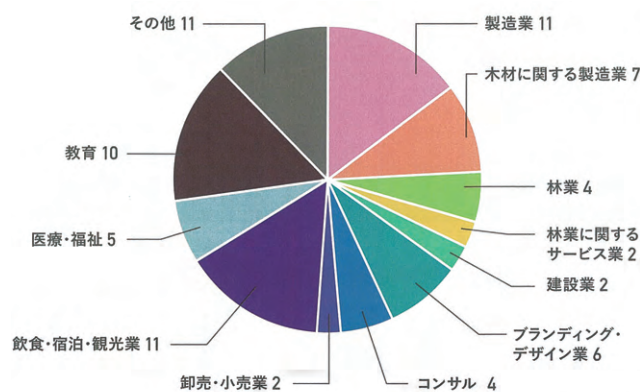
林業事業体：実際の作業・事業実施を担当

こうして、百年の森林構想の事業は軌道に乗ったのである。

当初の9事業体から 70超えの事業が集う村に成長

百年の森林構想には、ローカルベンチャーによる起業が大きく寄与している。当初は9事業体からのスタートだったが、2026年9月現在では70を超える事業を展開している。内訳を見ると、林業や木材に関する製造業などが多いが、ほかに、ブランディング、デザイン、コンサルティング、飲食、宿泊、

西栗倉村のローカルベンチャー



※2021年9月時点

観光業など多彩な分野の業種が展開されていることが分かる。売上げ総額は現在は23億円に達しているという。

こうしたローカルベンチャーの代表者はIターン者が多く、同村の出身者の数倍規模だ。

「ほかの自治体に比べ、村外から移住してくる人が多いというのが西栗倉村の特徴です。百年の森林構想が始まって20年ほどですが、子どもたちが育って村外、県外へいったんは出て行っても、事業体が増えてさまざまな仕事ができるという環境が整うことで就職の選択肢が増え、村外、県外へ出た若い人たちがますます多く戻ってくるようになってほしいと思っています」（井上さん）

百年の森林構想は10年経って 次の段階へステップアップ

2008年から始まった百年の森林構想は、今年で18年目を迎えている。2008年からの10年間をバージョン1.0とすれば、事業はステップアップして現在はバージョン2.0の半ばに達している。

「百年の森林事業を通じて、いま現在、村外から移住して定住されている住民、あるいは関連企業で働いている住民が大変多くいます。西栗倉村の人口は約1,300人ですが、そのなかで百年の森林事業関連に携わっている住民は約250人もいます。

産業に関していうと、村内で100人以上の雇用が創出され、関連企業の総売上げは構想当初のおおよそ1億円から23億円に膨らみました」（井上さん）



伐採作業には重機が導入されている（写真提供：西栗倉百年の森林協同組合）

現状では、森林整備そのものが黒字化しているわけではないという。しかし百年の森林事業を契機として、林業事業だけではなく木材加工、木質バイオマス、宿泊、観光、教育など、幅広い事業が拡大してきているそうだ。結果として、地域の雇用と売上に一定の効果が出てきているという。

百年の森林構想による事業が順調に推移し成功したといえる秘けつはどこにあるのだろうか。井上さんは言う。

「人々の間に『起業してみよう』という強い気持ちが生えているのが一番だと思います。さらにそれを支える仕組みも重要でした。現在は、別事業体となっていますが、村ぐるみで起業へのチャレンジを応援する〈西栗倉ローカルベンチャースクール〉があり、起業のための情報提供、起業ノウハウを伝える研修などを実施しています」

百年の森林構想のバージョン1.0では、木を伐採して加工し、販売するという従来型の林業のビジネスモデルが中心だった。

それがステップアップしてどう進化したかという、木材だけではなく森林そのものの価値（空間・動植物・山菜・木の実など自然全体）を活用する方向へと拡大していったのである。

事業が拡大している例として、〈100年の森のホテル^{しおり}菜〉がある。もともと同地には国民宿舎あわくら荘があった。老朽化が進み既に閉鎖されていたが、それを解体した跡地に新たに開設した近代的な宿泊施設である。地域の木材を使用したぬくもり豊かな施設で、春夏秋冬の自然の恵みをさまざまなかたち



百年の森林構想事業を象徴する〈あわくら会館〉。役場庁舎と生涯学習施設・図書館が共存している。写真は「百森ひろば」と呼ぶホール。イベントが行われるなど多くの町民が訪れる（撮影：YOSHIHIRO ASADA/ViBRaPhoto）

で受けることができる。

食に関する事業展開も盛んに行われている。

ジビエ・山菜・木の実・山の果物などを食材として利用するカフェやレストランなどである。

百年の森林構想バージョン2.0を象徴するような建物が2021年に完成した。村役場庁舎・生涯学習施設・図書館からなるあわくら会館である。村内から伐採された材木をふんだんに使用した木造（一部鉄筋コンクリート造）2階建ての建物数棟が、約5,400㎡の敷地に主要な3棟を中心に配置されている。

庁舎と生涯学習施設・図書館が有機的に一体となっ

た会館だ。百年の森林構想と起業型人材育成を中心とした地域づくりを目指す西栗倉村を象徴するように、村産材活用と村内事業者が円滑に協働したことで、村産材率97%を達成したという。

なおこの建物は、2021年度木材利用優良施設等コンクール（主催：木材利用推進中央協議会）で内閣総理大臣賞を受賞した。

百年の森林構想はさらに 新たな価値の実現を目指す

2008年の策定から約10年後の2018～2019年に1.0からバージョンアップした「百森2.0」も7年

が経過した。

現在、村では生物多様性の視点を取り入れた地域戦略の策定を予定している。森林を、木材生産だけではなく生物多様性、自然資本、防災、脱炭素等の多面的な価値から捉えてゆこうというものだ。

2018～2019年に始動した百森2.0は、依然として村有林のみでの試験的運用にとどまっており、全面的な推進には至っていないという。

SDGsや生物多様性の世界的潮流を踏まえ、着実な事業の推進を図りたいとのことだった。

数年後のもっと進化した百年の森林構想を推進する西栗倉村を訪れてみたい。



〈あわくら会館〉の百森ひろばで行われたイベントに集う住民。若い移住者が多く、小さい子どもたちも多い（写真提供：西栗倉村）



お話をうかがった西栗倉村役場産業観光課の井上裕貴さん